

19世紀初頭の地中海と「アルジェリア危機」

——トルコ政権崩壊の過程に関する一考察——

小山田 紀子

はじめに

1830年のフランスのアルジェ遠征は、その後132年間にわたるフランスのアルジェリア植民地支配を生み出す起点となり、フランスの伝統的歴史学に従えば、アルジェリアそしてマグリブ近代史の起点と捉えられてきた¹⁾。しかしそれは何よりもまず、16世紀以来西地中海におけるオスマン帝国支配の拠点であったアルジェのトルコ人政権の崩壊を意味していたことが想起されなければならない。アルジェのトルコ政権 (Divan)、すなわちデイ Dey を頂点とするアルジェ政庁 (Régence d'Alger) が、18世紀末から19世紀初頭のヨーロッパ列強の地中海進出にともなう国際関係の変化の中で、いかなる崩壊過程をたどることになるのか、そして地中海で競合するヨーロッパ諸国の中でフランスをアルジェリア征服に向かわせることになる状況はどのようにして生み出されるのか、19世紀初頭のデイ国家の最後の25年間 (1805～1830年) の“アルジェリア危機”²⁾と呼ばれる時期を中心に、デイ政権とヨーロッパ諸国との関係から明らかにしていきたい。

ところで、アルジェリアがオスマン帝国の一属州に編入されるのは、16世紀初頭、レコンキスタに伴う地中海の北側からのスペインの脅威に対して、商人貴族の支配する都市アルジェがオスマン帝国の海軍に支援を求めたことに始まる。そしてアルジェリア防衛のために導き入れられたトルコ海軍は、もとギリシアのミティレヌ Mytilène 島出身の海賊でイスタンブールのスルタンの臣下であったが、この時アルジェの主権者となった。海賊の首領ハイレッディン Kheireddine³⁾ は、1518年イスタンブールのスルタンよりベイレルベイ beylerbey (オスマン帝国の州長官) の公的権力を認められ、アルジェにお

かれたトルコ歩兵の軍隊オジャック Odjak の権力の下で、アルジェリアにおけるトルコ国家の支配体制が確立したのである。したがって、アルジェ政庁成立後もトルコ人の経済活動は海軍を中心とした地中海の海賊活動にあった。ところが、17世紀後半からイギリス・フランスの地中海進出により、トルコ人の経済活動とアルジェ政庁の支配体制に変化が生じてくる。オスマン帝国の衰退に伴い、これまでイスタンブールのスルタンより派遣されていた、トルコ総督パシャ Pacha によるアルジェリアの統治制度は1671年に廃止され、以後アルジェに駐在するトルコ人の軍人の中から選ばれたデイの下で統治されることになり、オスマン帝国から自立化の方向をたどる⁴⁾。そして、17世紀半ばまで盛んであったトルコ人の海賊活動は、ヨーロッパ勢力の進出によって打撃を受け、そこからの収入の減少に伴って、国家の財源を求めるトルコ人の経済活動は、内陸部の部族支配へと向けられていく。それは、農耕牧畜生活を営む部族からのトルコ人による土地の没収、および土地からの収穫物の搾取に向けられ、そのために陸軍オジャックとそれを補完する特権的なマフザン makhzen 部族を再編強化しなければならなかった⁵⁾。さらに、土地に対する徴税制度の確立およびそのための行政組織の整備が17世紀後半以降のトルコの支配構造を形成した。

デイを頂点とする中央権力は、最高権力機関ディヴァン Divan において、デイが任命する5人の大臣および高級官僚から成り、アルジェを中心とするデイの直轄領にこれらトルコ高官が駐在していた。直轄領を除く地域は、東のコンスタンチヌ Constantinian 州、中央のティトゥリー Titteri 州、西のオラン Oran 州の3つの地方行政区画ベイリク beylik に区分され、デイによって任命された3人

のベイ Bey がそれぞれのベイリクで地方行政権を組織していた⁶⁾。しかし、トルコの国家権力は領土全体に同一の濃度で浸透したのではなく、トルコの国有地や、税徴収権をトルコ高官や在地有力者、特権部族に委託したアゼル azel 地（譲渡地）は沿岸平野部、大都市近郊など限られた地域に分布していた。このようなデイ政権の内陸部族に対する政策については、拙稿「フランス植民地化前アルジェリアの土地制度」⁷⁾において分析したが、このトルコ権力に対抗するアルジェリア内部の諸社会階層間の土地をめぐる対立抗争が、フランス征服前夜に至るアルジェリア社会の変動を規定する要因であった。そして、ヨーロッパ勢力の地中海進出に伴う経済的封鎖により、トルコ政権による農民層の搾取はますます強化され、貧窮化した農民層の不満は、スーフィー教団タリーカ *tarîqa* によって結集され組織化されて19世紀初頭に頻発する農民蜂起としてあらわれる。筆者は、このような農民蜂起のトルコ領全体への拡大がヨーロッパ列強のアルジェ干渉という外的要因と結びつくことによってデイ政権を崩壊へと導いたと述べたことがあるが⁸⁾、このような内的要因のみによってトルコ政権の崩壊は説明できない。西地中海の要衝の地アルジェ⁹⁾に本拠を置いていたデイ政権は、18世紀以降のヨーロッパ勢力の経済的外交的進出に対応したさまざまな政策を打ち出さなければならなかった。

そこで本稿では、地中海に視点を移し、デイ政権の対外政策を地中海の国際関係の中で分析し、アルジェ政庁を崩壊へと導くことになる外的要因を、主にデイ政権の経済的危機という観点から明らかにしようとするものである。まず第1に、アルジェリアの地中海貿易について、農村経済と海外市場との関係から解明し、次いで19世紀初頭の地中海情勢の変化の中に巻き込まれたデイ政権が生き残りの道を探りながらもやがていかなる終焉を迎えるのか、その経緯を明らかにしていきたい。

191.

3) ハイレッディンは、兄ウルージュとともに赤ひげの海賊バルバロッサ兄弟と呼ばれ、西地中海の支配者となるバルバリア海賊であった。バルバリア海賊とは、一部は生粋のトルコ人やムーア人であるが、大部分はバルバロッサ兄弟のように、キリスト教世界のあらゆる地方から自ら進んで、あるいは海賊にさらわれてやってきた改宗者であり、彼らはムスリム海賊として、キリスト教諸国の船を襲っていた。拙稿「赤ひげの海賊・バルバロッサ兄弟」週刊朝日百科『世界の歴史』73, 朝日新聞社, 1990年。またバルバリア海賊の歴史については、スタンリー・レーン・プール（前嶋信次訳）『バルバリア海賊盛衰記』リプロボート, 1981年, を参照。

4) Gaïd (Mouloud), *L'Algérie sous les Turcs*, Tunis, 1975.

5) Laroui (Abdallah), *L'histoire du Maghreb II*, Paris, 1976, p. 56.

6) Julien (Ch. -André), *Histoire de l'Algérie contemporaine*, Tome I, Paris, 1964, p. 4.

7) 拙稿「フランス植民地化前アルジェリアの土地制度」『国際関係学研究』No. 8, 津田塾大学, 1981年。

8) 拙稿「オスマン帝国支配末期の『アルジェリア危機』——フランスによる植民地化の原因をめぐって——」『吉備国際大学研究紀要』創刊号, 1991年。

9) 16世紀以来、バルバリア海賊の拠点となったアルジェは、海賊の都市であると同時に、私掠品の交換のための、活発な商業中心地でもあった。フェルナン・ブローデル著／浜名優美訳『地中海』Ⅲ, 藤原書店, 1993年, 346-360頁。

I アルジェリアの農村と海外市場

オスマン帝国支配の後半期、アルジェのデイ政権はヨーロッパ列強の地中海での勢力拡大に伴う私掠活動からの収入の低下を補うために、アルジェリアの農民層から可能な限りのすべての生産物を吸い上げ、ヨーロッパ市場への輸出を押し進めることになる。デイ政権は農民からはその生産物を地方の低価格で買い上げ、ヨーロッパ市場ではそれを高い市場価格で売りさばき、差額を国家の収入として得るのである。このようにデイ政権によって独占されたアルジェリアの農産物流通には、外国人商人や外国の海運業者が重要な役割を果たすことになる。まず本章では、アルジェリアの農村とヨーロッパ市場とを結びつけることになる地中海貿易がどのような要因によって促進されるのかを検討した上で、18世紀後半から19世紀初頭にかけてのデイ政権による対外貿

1) Ageron (Charles-Robert), *Histoire de l'Algérie contemporaine*, Paris, P. U. F., (Q. S. J. No. 400) 1974, p. 3.

2) Lacoste (Yves.), Nouschi (André), Prenant (André), *L'Algérie passé et présent*, Paris, 1960, p.

易の実態を貿易バランスの分析から明らかにしてみたい¹⁾。

1 海運業と関税

18世紀の最後の四半世紀以来、アルジェリアの海運業はほとんど活動していないと言ってよい状態であった。イタリアのリボルノ Liborno とフランスのマルセイユ Marseille の船舶貨物を扱うごく少数のアルジェリア人商人——たとえばベン・オマル Ben Omar, ブ・ダルバ Bou Darba, ベン・ネグロ Ben Negro, ハムダン・コージャ Hamdan Khodja²⁾——を除けば、アルジェリア人はヨーロッパ諸港への海上運輸にほとんど参加しておらず、貿易からの利益を、自国による保護を受けていたヨーロッパ人商人や地中海貿易で活躍するユダヤ人商人、ギリシア人商人に譲り渡していた³⁾。さらに自国の商人の利益となるように導かれたヨーロッパ諸国家の商業政策は、アルジェリア商人の地中海貿易への参入をますますむずかしくしていた。たとえば、1811年、アルジェリア人の扱うさまざまな商品はフランスの支配下にあった諸港の税関においてすべて没収された⁴⁾。また、アルジェリア人の海運業を打ち立てようとする努力も、より整備されたヨーロッパ諸国の海運力の前にその成功の機会を全く見出すことができなかった。アルジェリアの地中海貿易において海上運輸で重要な役割を担ったのは、〈表1〉で示されるような、マルセイユの海運業者であった。

このような地中海貿易におけるアルジェリア人の活動の締め出しは、ヨーロッパ人商人の利益となるアルジェ政庁の保護関税の撤廃に向けての変化とともに深刻さを増していった。18世紀初頭、ヨーロッパ諸港とくにリボルノとマルセイユの貿易商品は、アルジェにおいて輸入に12.5%、輸出に2.5%の関税が課せられていた⁵⁾ののだが、ヨーロッパの2大商業国、イギリス・フランスはアルジェ政庁との平和友好条約によって大きな特権を得ていた。イギリスは、1700年に締結され1716年に再確認された条約によって、輸入に5%、輸出に2.5%の関税を支払うことが取り決められた。フランスも1718年1月16日の条約により同じ特権を得ていた⁶⁾。このように

表1 アルジェ港におけるマルセイユの海運業者の船舶の出入港

年	1806	1807	1808	1809
船舶数	20隻	21	17	20
輸送物資の量	2,639 t	2,064	1,777	2,754

典拠：Masson (P.), "A la Veille d'une conquête, concessions et compagnies d'Afrique, 1800-1830", *Bulletin de Géographie historique et descriptive*, 1909, p. 78, in Saidouni (N.), *La vie rurale dans l'Algérois de 1791 à 1830*, Université de Provence, Aix-en-Provence, 1987-1988, p. 619.

関税額が軽減されていく中で、アルジェリアの諸港は税関におけるコントロール機能を失っていく。すなわち、ユダヤ人商人やヨーロッパ人商人は、輸入に対して10～12.5%の税を課せられていたのだが、アルジェリアの税関における手続きを巧妙な手段でくぐり抜けることによって、輸入税を約4%しか支払っていなかった。また、アルジェリア人、トルコ人、その他のムスリム商人は5%の関税が課せられていたが、実際には1%しか支払っていなかった⁷⁾。このような関税額の軽減そしてすべての保護の撤廃に向けての動きは、アルジェリアの農村経済を海外市場に結びつけることとなり、農民の生活を海外市場の影響下におくという危険にさらすことになった。アルジェのデイ国家の最後の数十年間、アルジェリアの農業生産物は、ベイリクのトルコ人役人を介して、あるいはユダヤ人やヨーロッパ人商人を介して可能な限りのさまざまな商品が大量に吸い上げられて、アルジェ港をはじめ沿岸諸港からヨーロッパ市場に向けて送り出されることになった。

2 トルコ政権による農産物市場の独占

アルジェのデイ政権によるアルジェリアの農産物と市場の独占は、先に述べたように、地方でのその購入価格とヨーロッパ市場での販売価格との差額によって保証される一定の収入を得るために、自由貿易によって輸出できるすべての生産物（穀物、羊毛、皮革、油、蠟、塩など）を農民から汲み上げることを目的としていた⁸⁾。これは、アルジェリアの私掠活動の衰退に伴うそこからの収入の低下を埋め合わせるために、農村経済をトルコ人の国家管理の下に置くよう導くこととなり、トルコの海軍に代わってますます権力を増強する陸軍オジャック⁹⁾にその利益をもたらすことになった。農産物取引のすべて

表2 アルジェのデいの倉庫における生産物貯蔵量
(1830年)

生産物	貯蔵量	生産物	貯蔵量
小麦	9,585q (1 quintal=100kg)	塩	2,030q
大麦	590q	布地	9,762枚 (379,380m)
蠟 (cire jaune)	759q	木炭	2,000q
羊毛	4,918q (7000荷)	米 (riz salé)	150q
皮革	7,453枚	酢	26,850ℓ
(オリーブ) 油	9,000 ℓ	その他 (コーヒー・胡椒・エキス・リネン等)	1,064,001.60 Fr. 相当
バター	766壺		

典拠: Saidouni (N.), *op. cit.*, pp. 622-623.

注: 本表は典拠の Saidouni (N.), が次の文献資料から打ち立てたもの。
A. M. G. H. 225, *Notes sommaires sur les denrées et marchandises trouvées dans les magasins de la Régence d'Alger et leur valeur approximative*, s. d.; Denniee (Baron), *Précis historique et administratif de la compagnie d'Afrique*, Paris, 1830, p. 79.

において農民 fellahs と市場 (海外市場と国内市場) との仲介者として振まうトルコ人役人は、時として徴税請負権を外国人商人に与え、生産物の集荷を彼らに任せた。たとえば、オリーブ油の取引はユダヤ人商人にデイが認可を与え、ユダヤ人商人は軍隊とアルジェの都市住民に必要な量のオリーブ油の供給をすべて独占していた¹⁰⁾。またベイリクによって独占されていた羊毛取引の例を挙げよう。ベイリクが牧畜民に15リーヴル (livres) を支払って得た羊毛 (原毛) は、ユダヤ人商人に24リーヴルで転売され、彼らはそれをマルセイユに輸送し、38リーヴルで売った。この取引におけるデイの利益は30%、ユダヤ人海運業者の利益は50%、そして羊毛の価格としては84%値上がりした¹¹⁾。

このような農産物市場の国家的独占は、エジプトのムハンマド・アリー政策にも見られるものであるが、アルジェリアの場合、それはアルジェリア商人からあらゆる主^{イニシアチブ}導権を奪い去る商業政策であり、農民を犠牲にしてアルジェリアの農村経済を荒廃へと導く要因となった。デイ政権による農産物市場の独占がどれほど大きいものであったかは、オジャックが集めた農産物の貯蔵量を調べることによってしか知ることはできないであろう。そこで最後に、フランス征服時の1830年に、フランス軍がアルジェのデいの倉庫で発見した生産物の一覧を〈表2〉で示すことにしよう。

3 貿易のバランス

さて、アルジェリア国内市場においてデイ国家が集積したこれらの農産物は海外市場のどこへ向かうのであろうか。またアルジェ政庁は海外からどのような商品を輸入していたのであろうか。次にアルジェリアの貿易バランス (収支) を見ることによって、デイ国家末期のアルジェリア経済の特徴を明らかにしてみたい。

まず、18世紀のアルジェリアの輸出入商品についてみていこう。第1に、マグリブ Maghrib, オスマン帝国の諸州そしてスーダン Soudan (サハラ以南ブラック・アフリカを指す) に向かう輸出品は、アルジェリアの地方の手工業品——ウール地、毛布、ショール、バーヌース (アラブ人の頭巾付き袖なし外套)、縁なし帽 (tarbouch), 皮革製品、絹のベルト、刺繍つきハンカチ——と、少量の農産物——小麦、オリーブ油、蠟、蜂蜜、羊毛、バター、レンズ豆——であった。これらの輸出は、アルジェリア経済を補完するものであり、利益を生み出すものであった。第2にヨーロッパ諸国に向かう輸出品は、食糧品のみに限られており、大部分が小麦をはじめとする穀物で、これに羊毛、皮革、蠟、蜂蜜、オリーブ油、ブドウ、タバコ、乾燥イチジク、ナツメヤシ、香水用のバラのエッセンス、雌羊、馬肉、ダチョウの羽根、塩が加わる¹²⁾。

第3に、イスラム諸国からアルジェリアに入ってくる輸入品は、陸路あるいは海路 (チュニス Tunis, ロゼット Rosette, ダミエット Damiette, アレキサンドリア Alexandrie, スミルヌ Smyrne, ベイルート Beyrouth の各港から) 輸送されてくる次のような手工業品であった。すなわち、絹織物、亜麻布地、宝石、布地、縁なし帽、ハンカチ、ベルト、香辛料、胡椒、コーヒー、砂糖、米、塩化アンモニウム、それからベルシャやインドのさまざまな商品等¹³⁾。

第4に、ヨーロッパ諸国からの輸入については、まず国別の輸入額の割合をみると、フランスからおおよそ50%、オランダ25%、イギリス12.5%、ベネチア12.5%であった¹⁴⁾。輸入量の最も多いフランスからの商品の大部分は、マルセイユ港から輸送されるもので、その半数近くは毛織物 (draps) で

あった¹⁵⁾。その他には布地、ビロード、織物、鉄製品、ブリキ、銅製品、宝石等が輸入されていた。イギリスは、アルジェリアに向けて自国の工業製品と植民地の加工食品を輸出していた。イタリアの諸港からくる輸入品の中では、香辛料、ジェノヴァで細工された大理石、ハンカチーフ等が挙げられる¹⁶⁾。

18世紀末頃におけるアルジェへの輸入品は地中海のどこの港から入ってきたのかを示す〈表3〉から、18世紀末においてもマルセイユとリボルノとの関係が最も重要であったことがわかる。しかし、19世紀に入ると、イギリス・フランスの競合関係が激化し、1806年からのイギリスによる10年間のアルジェリア貿易の独占は、フランスとイギリスからの輸入額を逆転させる。1822年のアメリカ領事シェイラー Shaler (William) の報告によると、この時期のアルジェリア輸入品の貿易相手国別割合をみると、イギリスが1位で40％、スペインが2位で25％、フランスはスペインをも下回る17％であった¹⁷⁾。

さらにフランス征服前夜の1826年における輸入額に関する統計を〈表4〉でみてみよう。これからみると、フランスとの貿易関係が1822年の条約以降再開するとは言え、フランスはかつての貿易量を回復してはいないことがわかる。

次に、19世紀初頭の30年間のアルジェリアの貿易収支の変化を〈表5〉から検討してみよう。この表で示される数字は、1800年、1802年、1805年にはいまだアルジェリアの輸出超過を示している。これはフランス革命とナポレオン戦争期のヨーロッパへの小麦を中心とする食糧品輸出の増大によるものと考えられる。しかし、1806年から1816年の間のイギリスによるアルジェリア貿易の独占は、フランス・アルジェリアの貿易関係を断絶し、アルジェリア小麦はフランス市場を失ってしまった¹⁸⁾ことが、輸出量を激減させた原因と思われる。そして、1822年以降の数字で示される赤字の貿易収支は、フランス征服まで解消されることはなかった。

以上、アルジェリアの輸出入品および貿易相手国の分析と、19世紀初頭の貿易収支の検討を通じて明らかにされたアルジェリアの貿易構造は、食糧品・原材料のみを輸出し、製造品しか輸入しないという従属的経済の特徴を示すものであった。アルジェリ

表3 アルジェへの主な輸出港別アルジェの輸入額 (18世紀末)

貿易港	積荷量 (年間)	輸入額 (年間)
マルセイユ	5～6 荷	800,000Lb (リーブル?)
リボルノ	2～3	1,000,000
トルコおよび アレキサンドリア	2～3	300,000

典拠：Venture de Paradis, *op. cit.*, p. 135.

表4 アルジェリアの輸入相手国と輸入額 (1826年)

輸入相手国	輸入額	割合
リボルノ	1,440,000Fr.	24.69%
イギリス・インド	1,344,000	23.04
フランス	1,200,000	20.57
ジブラルタル・マルタ	768,000	13.16
レバント	432,000	7.40
ジェノヴァ・トスカナ	384,000	6.58
北ヨーロッパの諸港	144,000	2.46
チュニス・モロッコ・トリポリ	120,000	2.05
合 計	5,832,000	100

典拠：Cité par Clauzel (Général) et Desjobert (A.) d'après les renseignements de Shaler (W.), *Esquisse de l'état d'Alger considéré sous les rapports politique, historique et civil...*, trad. de l'anglais et enrichi de notes par M. Bianchi, Paris, 1830, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 625.

表5 アルジェリアの貿易収支 (1800～1830年)

年	貿易総額	輸出額	輸入額	貿易収支
1800	4,800,000Fr.	2,600,000Fr.	2,200,000Fr.	+ 400,000Fr.
1802	16,000,000	12,000,000	4,000,000	+ 9,000,000
1805	14,000,000	9,000,000	5,000,000	+ 4,000,000
1822	8,000,000	1,500,000	6,500,000	- 5,000,000
1826	9,000,000	3,000,000	6,000,000	- 3,000,000
1830	2,303,406	—	—	—

典拠：Saidouni (N.), *La vie rurale dans l'Algérois de 1791 à 1830*, *op. cit.*, p. 626.

注：本表は、典拠の Saidouni (N.) が次のような文献資料から作成したものである。

T. S. E. F. (Tableau de la situation des Etablissements Français en Algérie), 1830-1837 p. 323.; Shaw (Dr), *op. cit.*, p. 15.; Commission d'Afrique, Procès-verbaux et rapports, *op. cit.* T. I. pp. 443-445.; Shaler (W), *op. cit.* p. 104.; Allard (F. A.), *op. cit.* p. 15.; Emerit (M), *L'Algérie de 1830...*, *op. cit.* p. 195.

アの地方の手工業は未発達であり、手工業製品は国内市場を満たすのにも不充分であり、したがって外国への輸出に向けられるものはほとんどなかった。

また、デイは増加する支出を埋め合わせ、1830年に近づくにつれて増々ふえつづける赤字の貿易収支を改善しようと、アルジェリアの農産物輸出を促進するために、ヨーロッパ諸国の営業権の独占や特許の承認、ユダヤ人商人への特権の授与というようなさまざまな経済手段を次々に打ち出していく。このような農産物輸出は、オスマン帝国の他の諸州と同じように、東地中海に向かうよりも地中海の北側の

ヨーロッパ（フランス、イタリア、スペイン）市場へと向かわせることとなり¹⁹⁾、マルセイユ、リボルノ、ジブラルタルの諸港、ギリシアの諸港とアルジェリアとの永続的な貿易関係をつくり出した。そしてこのような地中海を介しての貿易ルートは、これまでイタリアの商業都市から多くの製品を輸入してきたアルジェリアを、さらにヨーロッパ（フランスとイギリス）の工業製品の市場と成し、ヨーロッパ列強諸国に対するアルジェリアの従属的な経済構造を形成することになった。このように、デイ政権の無知と軽率な政策によってますます強化されていたアルジェリア貿易のヨーロッパへの従属は、アルジェリア農業を破壊し、農民層を犠牲にして国内経済の荒廃をもたらした。やがてデイ政権に対する農民蜂起が激しさを増し、デイ国家を崩壊へと導いていく国内的要因がつくり出されていくことになった²⁰⁾。

- 1) 本稿における経済的・統計的分布の多くは、次のアルジェリア人歴史学者の研究に依拠している。
Saidouni (Nacereddine), *La vie rurale dans l'Algérois de 1791 à 1830*, thèse pour le doctorat d'Etat es-lettres et sciences humaines, Université de Provence (Aix-Marseille I), année universitaire 1987-1988, (directeur de recherche du Professeur Robert Mantran). なお、サイドゥニ氏（アルジェ大学教授）の本研究の位置づけについては、次の研究史を参照。拙稿「研究案内、マグリブ（近現代）」板垣雄三監修『イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所, 1995年。
- 2) Genty de Bussy (P.), *De l'établissement des Français dans la Régence d'Alger et des moyens d'en assurer la prospérité*, Paris, 1831, T. II. pp. 268-270, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 618.
- 3) Emerit (M.), "L'essai d'une marine marchande barbaresque au XVIII^e siècle", *Cahiers de la Tunisie*, n°11, 1955, p. 369, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 619.
- 4) Labord (Le Comte A. L. J. de), *Sur la guerre actuelle avec la Régence d'Alger*, Paris, 1830, p. 14, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 619.
- 5) Morgan (J.), *Histoire des états barbaresques qui exercent la piraterie contenant l'origine, les révolutions, l'état présent des royaumes d'Alger, de Tunis, de Tripoli et du Maroc, avec leurs forces, leurs revenus, leur politique et leur commerce*, trad. de l'anglais par Boyer de Premaudie, Paris, 1757, T.

- II. p. 47, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 620.
- 6) Laprimaudie (M. F. E/de), "Le commerce et la navigation de l'Algérie avant la conquête française" (extrait de *La Revue Algérienne et Coloniale*, T. II-III, 1860), Paris, 1861, p. 192; Le Roy (M.), *Etat général et particulier du royaume d'Alger*, La Haye, Von Dols, s. d. p. 195; A. G. *Documents instructifs peu connus sur l'histoire et les révolutions d'Alger*, Paris, 1838, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 620.
- 7) Venture de Paradis, "Alger au XVIII^e siècle", *Revue Africaine*, T. 39, 1895, pp. 265-314.
- 8) Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 621.
- 9) Lacoste (Y.) *et al.*, *op. cit.*, p. 143.
- 10) Trapani (D. G.), *Alger qu'il est au tableau statistique, moral et politique de ce royaume*, Paris, 1830, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 622.
- 11) Emerit (M.), "La situation économique de la Régence d'Alger en 1830", *Information Historique*, n°2, Mars-Avril, 1952, p. 171, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 622.
- 12) Pananti, *Relation d'un séjour à Alger contenant des observations sur l'état actuel de cette Régence*, trad. de l'anglais par Blanquière, Paris, 1820, p. 361.; Morgan (J.) *op. cit.* T. II, p. 52; Laprimaudie (M. F. E. de), *op. cit.* pp. 189-190, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 623.
- 13) Vallière (C. Ph.), *L'Algérie, en 1781, Mémoire du Consul C. Vallière*, pub. par Lucien chaillou, Toulon, p. 65.; Perrot (A. M.), *Alger, esquisse topographique du royaume et de la ville*, Paris, 1830, pp. 46-47; Laprimaudie (M. F. E. de), *op. cit.*, pp. 189-190, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 624.
- 14) Commission d'Afrique, procès verbaux et rapports, T. I, PP. 443-445. cité par Yacono (X.) dans "La Régence d'Alger en 1830, d'après l'enquête des commissions de 1833-1834", R. O. M. M. n°2, 1966, p. 238, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 624.
- 15) Allard (M.), *Considérations sur la difficulté de coloniser la Régence d'Alger et sur les résultats probables de cette colonisation*, Thèse, imp. de Selligne, 1830, p. 11, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 624.
- 16) Commission d'Afrique nommée par la roi, le 7 Juillet 1833, *Procès-verbaux et rapports de la Commission d'Afrique*, Paris, Imp. Royale, 1834, T. II., p. 444.
Perrot (A. M.), *Alger, esquisse topographique du royaume et de la ville*, Paris, 1830, p. 47, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 624.
- 17) Lacoste (Y.) *et al.*, *op. cit.*, pp. 190-191.

- 18) Lacoste (Y.) *et al.*, *op. cit.*, p. 188.
19) Mantran (R), "Le statut de l'Algérie, de la Tunisie et de la Tripolitaine dans l'Empire Ottoman" in *Atti del I Congresso Internazionale di Studi Nord-Africani*, Cagliari, 1965, p. 214, in Saidouni, *op. cit.*, p. 626.
20) 前掲拙稿「オスマン帝国支配末期の『アルジェリア危機』」, 165-166, 170頁。

II 19世紀初頭の地中海とデイ政権

以上のように、アルジェリアの海外貿易は18世紀末以降、ヨーロッパへの農産物輸出の増大により、アルジェリア農村とヨーロッパとりわけフランス市場との関係が強まってくるのだが、19世紀初頭の「アルジェリア危機」と呼ばれる状況はこのような地中海貿易の影響のみによって説明できるのではなく、この時期の地中海世界を特徴づけていたいくつかの情勢についても分析されなければならない。そこで次に、19世紀初頭のデイ政権を取り巻く地中海の情勢を、アルジェを拠点とするバルバリア海賊の衰退と、地中海で競合するヨーロッパ列強諸国の外交的経済的進出、そして特にフランスとアルジェ政庁との関係を中心に検討し、やがてフランスをアルジェ遠征に向かわせることになる状況がどのようにして作り出されるのか、ユダヤ人商人の活動や革命期のフランスへのアルジェリア小麦の輸出問題などから解明していきたい。

1 海賊活動の衰退とヨーロッパ列強の進出

先述のとおり、アルジェ政庁成立後もトルコ人の経済活動は海軍を中心とした地中海における海賊活動にあり、この私掠からの収入がオジャックの財政的な繁栄を維持していた。しかし、17世紀後半以降、ヨーロッパ勢力の地中海進出によって私掠からの国庫収入が減少し、トルコ海軍の権力は失墜していく。そして地中海の制海権をヨーロッパの艦隊（オランダ、フランス、イギリス）に譲り渡すことによって、アルジェの私掠活動は17世紀後半以降急速に衰えていった。18世紀、アルジェの私掠がどれぐらい行われていたのかを示す次のような数字がある。1737～1799年の間、アルジェ政庁が私掠のために装備した船は延べ1008隻、年平均16隻であった。また1765～

1799年の間、アルジェの船団が行なった私掠は全部で376件、年平均11件であった¹⁾。この数字からだけでも、アルジェの私掠活動の低下とそこからの収入の大幅な減少が推察できる。1795年にはアルジェの海軍はもはや12隻ほどの艦船をもつにすぎなかった²⁾。しかし、ナポレオン戦争の時期、アルジェの私掠活動は一時的な回復をみる。すなわち、アルジェ船団の出力がやや回復し、1802年には20件の略奪が行われ、そこから得られた収入の総額は57万5125.74フランにのぼったと記録されている。1814年には17件の略奪により、195万4132.86フランの収入が得られた³⁾。たとえば、海賊の首領ハミドゥ Hamidou の船団が行なったポルトガルのフリゲート艦への激しい攻撃と略奪では、10万3590フランの収入が得られた⁴⁾。しかし、後者（1814年）の収入総額はヨーロッパ商品のコストの上昇によるものであり、1802年の収入額を上回るものではなかった⁵⁾。

1815年のヨーロッパにおける戦争の終焉は地中海の情勢に変化をもたらし、アルジェの私掠活動はこれにより大きな打撃を受ける。1815年のウィーン会議において、ヨーロッパ列強諸国はバルバリア海賊のヨーロッパ船に対する略奪行為を終わらせることを議論していた⁶⁾。地中海で競合していたヨーロッパ諸国に対して提起された課題はまず第1にバルバリア海賊の鎮圧であり、19世紀初頭以来、その重要な拠点であったアルジェに対する干渉が高まってきていた⁷⁾。アメリカ合衆国とイギリスのエクスマウス Exmouth 卿のアルジェ遠征の例をやや詳しくみておこう。

アメリカ合衆国は、それまで海賊の被害を受けずに地中海における商業活動を守るために、アルジェのデイに、100万スペイン・ドル以上の賄賂と巨額の通貨や海軍の必需品を毎年貢物として贈ることでアルジェ政庁と和議を結んでいた。しかし、1815年、ゲント（今のベルギー国内の港町）の条約で自由となると、合衆国はウィリアム・シェイラーをアメリカ領事として一艦隊をアルジェに派遣した。その結果、1815年6月30日には条約が締結され、これによって金銭の支払いは中止された。すべての捕虜と捕獲財産は返還され、合衆国は最恵国の立場に置かれ

ることになった⁸⁾。

イギリス政府はこのような予期していなかった合衆国の成功を見せつけられ、ついにエクスマウス卿を派遣した。1816年8月17日、チュニスでベイにその全領土内において、キリスト教徒を奴隷とする制度を廃止させた後、アルジェにとってかえし、同様の譲渡を要求するため、アルジェのデイと交渉した。しかし、アルジェのデイはこれを拒絶しエクスマウス卿自身が個人的に侮辱され、また部下2人の将校が暴徒のために街路を引きずりまわされた。このような非常事態に対して、エクスマウス卿は対抗処置もとれず、イギリスへ帰航した。しかし、帰国するかもしれないのうちに、ボーン Bône とオランでイギリスの保護の下に暮らしていたイタリア人がデイの命令によって多数虐殺され、ついに1816年8月25日、エクスマウス卿の旗艦シャーロット号は軍艦18隻をひきいて再びアルジェに向かった。オランダの提督ファン・カペラン Van Capellen は、艦船6隻を率いてジブラルタルで、この攻撃に参加したいと願い出てきた。こうして、2人の指揮官のもとにアルジェに送られた艦隊の目的は、キリスト教徒の奴隷の解放と同時に、1810年、イギリス貿易によって引き渡されたマスト、綱、火薬、その他海軍装備の支払いを要求することであった。その時まで、フリゲート艦5隻、軍艦3隻、2本マストの小帆船1隻、ガリー船1隻、砲艦30隻の代金をアルジェのデイは出し惜しみしていた。

8月27日、彼らの艦隊はアルジェに到着した。デイに対する休戦の申し入れは受け入れられず、戦闘が開始された。8時間余の合戦の末、イギリス・オランダの連合艦隊の砲撃によってアルジェの要塞は廃墟と化し、海賊の艦隊は滅び去り、あとに残ったのは2隻だけであった。このイギリスの勝利によって、エクスマウス卿はデイと条約を結んだが、それによると、「これから後は、戦争での捕虜は交換すべきで、奴隷にしてはならぬこと、それから現在、アルジェにいる1642人に達する奴隷たち（主としてイタリア人で、イギリス人は18人だけであった）の全部を即刻、解放すべきこと、およびデイはその年、イタリアからまきあげた約400ドルに達する金額を返却すべきことなどが決められていた」⁹⁾。

しかし、このイギリスの戦闘によるアルジェ艦隊の破壊と条約締結は、デイの海軍力による海賊行為を完全に終わらせるものとはならなかった。なぜならば、1818年のエクス・ラ・シャペル Aix-la-Chapelle¹⁰⁾ 会議の決議にしたがって、1819年にフランス・イギリス艦隊の提督たちが新任のデイに同一趣旨の覚書を送ったのに対して、デイは外国船舶に対する私掠を放棄することを拒否し、さらに彼の臣下が私掠からの利益に代わる経済活動を見出しえないと述べて¹¹⁾、この後も海賊活動が続けることを強調した。とは言え、これ以後私掠活動を再建しようとするデイの努力にもかかわらず、1830年前夜にはそれはヨーロッパ諸国の海運力の前に、もはや時代遅れのものとなってしまふ。

以上のように、18世紀から19世紀初頭にかけての西地中海は、アルジェを拠点とするバルバリア海賊の活動が衰退していき、代わってヨーロッパ列強諸国が外交的経済的手段によって、マグリブ諸国にその勢力の拡大をはかっていく転換期であった。ヨーロッパ諸国は、18世紀、マグリブ諸国の沿岸の大都市（タンジェ Tanger, オラン, アルジェ, ボーン, チュニス, トリポリ Tripoli）に領事をおき、定着し始めた自国民を保護し、通商上の利益を確保しようとする。この段階では一応自由競争の原理が貫かれていたが、18世紀末以降ヨーロッパ諸国間の競合が激化するとともに、各国の国力を背景として通商上の利益となる特権や特許を任地政府に認めさせ、商業特権を独占することによって排他的な勢力圏の確立をめざすようになる¹²⁾。このような外圧の高まりの中で、アルジェのデイ政権は最後の生き残りの道を探るのであるが、次に「アルジェリア危機」の時期におけるデイ国家の財政収入がどこに求められていたのか、もう一度考えてみたい。

17世紀後半までデイ政権の財政収入は主に外国船舶に対する私掠から得られていたことは、これまで述べてきたとおりであるが、18世紀以降の私掠からの収入の低下を埋め合わせるためにデイはアルジェリアの農産物輸出を押し進め、貿易からの利益を求めた。さらに、ヨーロッパ諸国の経済的外交的進出にともない領事がデイに支払う年貢や贈物が、デイ国家の最後の何年かにおいて、国家の重要な収入源

となっていくのである¹³⁾。ヨーロッパ列強諸国は、デイに貢物や贈物を与える反対給付として、自国の商社への特許や通商上の特権を得るのである。このようなデイへの年貢や贈物は、海賊活動や貿易の発展への桎梏となるものとししばしば見なされてきたのだが、しかしそれはアルジェの私掠活動を終わらせることはできなかったし、またそれはヨーロッパ商人への特許や列強諸国への営業権を生み出すものだったのである。そして、ヨーロッパ列強のアルジェ干渉が高まる19世紀初頭、デイはヨーロッパ諸国と次々に通商協定を締結していくのだが、それに伴ってヨーロッパ諸国がデイに支払う年貢や贈物の額は急速に増加していく。たとえば、フランス領事の就任式の際にデイに贈られたプレゼントの額を示す〈表6〉を見ると、18世紀末以降とくに19世紀に入ってから急増していることが読みとれる。

また〈表7〉は、1830年時のヨーロッパ諸国のデイへの年貢と領事の交代時に支払われた贈物との収入総額を国別に表わしたものである。ここから得られる収入は通貨と現物の両方から成るのであるが、フランスがとりわけ多額の納付を示しているのに対して、イギリスのその額の低さがきわ立っている。

以上のようなデイへの貢物や贈物から成る収入は、18世紀末から19世紀初頭に増加したにもかかわらず、それはデイの私掠からの収入の低下を埋め合わせて財政赤字を解消することはできなかった。さらにこの財政赤字は、ヨーロッパからの輸入品の値上がりや貿易による巨大な利益がヨーロッパ諸国の商人や海運業者に分配されたことによってますます深刻化していった。このように財政危機に直面するデイ政権は以後、ますますアルジェリア国内への依存を強めていくことになるが、こうした動きを、ヌッシ Nouschi(A.)はデイ国家の「アルジェリア化」¹⁴⁾と述べた。

さて、いよいよヨーロッパ列強の中でフランスをアルジェリア征服に向かわせる状況がどのように生み出されるのかについて、最後にフランスとアルジェ政庁との関係をみていかなければならないのだが、その前に、アルジェリア貿易において大きな役割を担い、やがて政治的にも重要な役割を果たすことになる、ユダヤ人商人の活動についてみておきたい。

表6 フランス領事の就任時のデイへの贈物

年	贈与額 リーヴル
1742	6,400
1763	13,200
1774	16,600
1791	48,000
1805	80,000
1811	160,000

典拠：Blavin, *La condition et la vie des Français dans la Régence d'Alger*, Alger, 1899, p. 79, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 630.

表7 ヨーロッパ諸国のアルジェ政庁(デイ)への年貢・贈物の総額

国名	デイへの納付額 フラン
フランス	806,660
イギリス	40,000
スペイン	150,000
ポルトガル	363,800
オランダ	160,000
オーストリア	200,000
アメリカ合衆国	15,120
トスカナ	123,750
シシリア	235,400
サルディニア	160,000
ハノーバー・プルーム	15,120
スウェーデン・デンマーク	27,750

典拠：Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 630.

注：本表は、典拠の Saidouni (N.) が次のような文献資料から作成したものである。Shaw (Dr.), *Voyage dans la Régence d'Alger ou description géographique, physique, philologique, etc. de cet état*, trad. de l'anglais avec des nombreuses augmentations ... par J. MacCarthy, Paris, 1830, pp. 211-212; *Venture de Paradis*, *op. cit.*, pp. 237-239; Bourbon (Prince Sixte de), *La dernière conquête du roi*: Alger, 1830, Paris, 1930, T. I. p. 16; Val Parisot, *Alger, Description Spéciale du fort, des fortifications, des monuments et de la position de la ville d'Alger*, Paris, s. d.

2 ユダヤ人商人の活動

イタリアのリボルノ出身でアルジェに住むユダヤ人商人は、トスカナ地方の自由港であったリボルノ港との関係を利用して、18世紀以来オジャック軍のトルコ高官の傍らで政治的商業的に重要な役割を果たし始めていた¹⁵⁾。もともとリボルノ港¹⁶⁾は、西地中海におけるイギリス人、オランダ人の貨物集散地であり、また海賊の私掠品の再分配地でもあった。リボルノにいたユダヤ人商人たちは、オスマン帝国の主要な港、とりわけアルジェ港とチュニス港との緊密な関係を保ち、アルジェの海賊船の私掠による略奪品の流通にその商業活動を特化していった。そして、このような活動を通じてリボルノのユダヤ人大家族がアルジェに移住してくるのだが、そうした中でもブスナッチ Busnach 家とバクリ Bacri 家は、アルジェにおいて巨万の富を築いたユダヤ人商人であった¹⁷⁾。彼らは複数の外国語を操り、有利な売買契約を結ぶ巧みな手腕とヨーロッパ諸国との永続的な関係を保っていたことから、アルジェのデイとオジャックの高官たちにその能力を認められて商業特権を得ていた。アルジェのトルコ人高官たち

は、ヨーロッパ諸港との貿易を促進するためにこれらユダヤ人商人との商業関係を保たざるを得なかったのである。

このようにして、リボルノ出身のアルジェのユダヤ人商人たちは、18世紀末頃には、デイ政権の高官たちが依存する第一の財務経営コンサルタントにのし上がっていった。たとえば、ハッサン・パシャ Hassan Pacha, エル・ハッジ・アリ・パシャ El Hadja Ali Pacha, ムスタファ・パシャ Mustapha Pacha のデイたちの場合がそうであったし、またティトゥリー州のベイ、ムスタファ・ベン・ウズナジ Mustapha ben Ouznadj (1775-1795年) は、ティトゥリー・ベイリク beylik de Titteri の財政管理をすべて、ユダヤ人のナフタリ・ブスナッチ Naf-tali Busnach に任せていた¹⁸⁾。フランス征服前夜1830年のアルジェリアの貿易は、次のようなユダヤ人商人——バクリ、セロール Seror, ルヴィ Levi, ヴァランシ Valensi, ナホン Nahon, ブスナッチ, ザクト Zacuto, トゥネス Tunes, アル・ヴァレンゴ Al Varengo, ロンサダ Lonsada, ボンジオルノ Bongiorno——によってほとんど独占的に行われていたことは、いくつかの商業登記簿から明らかにされている¹⁹⁾。

そしてこれらのアルジェのユダヤ人商人の中でももっとも活動的な人物の1人に、ミシェル・コーエン・バクリ Michel Coen Bacri がいた。ベン・ザウト Ben Zahout とあだ名されていた彼は、リボルノのある商会の会長であったのだが、1770年頃、アルジェにその支社を開設した。スタートにおいては小規模なアルジェ支社であったが、取引を行なう商品をアルジェリアの農産物に切り換えることによって1783年から発展し始め、リボルノの2大家族——バクリ家とブスナッチ家——の連合商会となった²⁰⁾。アルジェリア経済におけるこのバクリ・ブスナッチ商会 Maison Bacri-Busnach の影響力がいかに大きいものであったかは、前述のアルジェリア人商人ハムダン・コージャによって語られた、次のようなある興味深い商取引の中に表われているように思われる。

ハムダン・コージャによると、コンスタンチヌス州のウズナジ・ベイ bey Ouznadji は、ダイヤモンド

で飾られた宝石 (sarma) をデイの妻への贈物にするためにナフタリ・ブスナッチから買った。元の値段は3万フランでしかなかったその宝石は、30万フランという法外な値段にはね上がり、その30万フランは、低価格のアルジェリア小麦 (1升=40kg が4フラン) で支払われることになった。バクリ家はこの取引で約7万5000升の小麦を手に入れ、それをフランスに輸送して、1升50フラン以上という高価格で売りさばいた。これはフランス市場で小麦価格が高騰したためであるが、バクリ・ブスナッチ商会は、この取引だけで総額75万フランという巨額の利益を上げた²¹⁾。

このように、オジャックのトルコ人高官の無知と無責任が、そしてまたナポレオンのエジプト遠征につづくフランス—アルジェリア関係の断絶の結果アルジェ政庁が貿易相手国を見い出せなかったことが、バクリ・ブスナッチ商会の貿易独占を許し、この商会に大きな財産を蓄積させることになった。バクリ・ブスナッチ商会は巧妙な商取引によって、1800年の1年間だけで229万7445フランにのぼる利益をあげた²²⁾。デイの名の下でこの商人が行なったアルジェリア小麦の輸出は、アルジェリアの農民を犠牲にするものであったが、フランスとりわけマルセイユ港への輸出ルートがユダヤ人商人に確保されていることが、フランスへの小麦輸出を容易にした。後にフランスのアルジェ遠征の口実をシャルル10世に与えることになる1827年の「扇の一打」事件は、フランス革命中の総裁政府時代に、このユダヤ人商人を仲介にして行われた小麦取引をめぐるデイとフランスとの係争から引き起こされることになる。

3 フランスとの貿易関係と経済危機

さて、19世紀初頭のヨーロッパ列強による外圧の高まりの中で、アルジェリアは特にイギリス、フランスの競合関係の中に巻き込まれて、経済危機に直面することになる。まず、18世紀以降のアルジェ政庁とフランスとの貿易関係がどのようなものであったのかを見ていくことにしよう。

「アフリカ特許 concessions d'Afrique」という名で知られる商業特権は、アルジェ政庁がアルジェリアの農産物と畜産品の輸出を目的としてフランス

人商人に授与していたものである。その起源は16世紀初めにまで遡り、1520年以来認められていた商業特権であった²³⁾が、1561年ラ・カル La Calle の近くにフランス商館 Bastion de France が設立されるとともに消滅した²⁴⁾。しかし18世紀に入って再び、フランスの通商上の利益となるこの特許が復活する。1741年、マルセイユに設立されたアフリカ会社 Compagnie d'Afrique にこの特許が与えられ²⁵⁾、次いで王立会社 Compagnie Royale がこれを引き継ぐことになる。王立会社はレトワイエ・デルラン Leitoyer Dertrand の経営の下で、1777年から1794年にかけて大きな発展を遂げる²⁶⁾。そしてこの2つの貿易会社を仲介にして長期にわたり、アルジェリアの諸港から膨大な量的小麦がフランスに輸出された。1788年にアルジェリアからフランスに輸出された農産物は、小麦、大麦、野菜類を合わせて15万荷 (charges) にのぼった²⁷⁾。このように、18世紀後半には小麦をはじめとするアルジェリアの農産物はフランス市場と強く結びつけられていた。

フランスにおける1789年の革命は、あらゆる特権を廃止し、北アフリカの国々とさえ、営業の自由を宣言するものであったが、ただちに平和友好条約が調印され、1791年と1793年には新たな通商協定が締結された²⁸⁾。ヨーロッパにおける戦争は、フランスの総裁政府にアルジェ政庁との友好な関係を保つように導いた。すなわち、フランス領事が、寛大な友そして忠実な同盟国として適任であると見なしたアルジェ政庁のハッサン・デイ Dey Hassan²⁹⁾ は、友好のしるしとしてフランス政府に対する100万フランの貸付けに無利子で同意し、さらにフランス南部諸県の食糧需要とイタリアに駐留するフランス軍の食糧補給を満たすために、かなりの量的小麦をフランスに輸出することに便宜をはかった³⁰⁾。総裁政府は1795～98年の間、主にイタリアのフランス軍への食糧補給のために、アルジェ政庁に何度も小麦の注文を出したのである³¹⁾。そして、このアルジェリア小麦の取引を仲介したユダヤ人商人バクリとブスナッチは、小麦の相対的に高い市場価格を適用し、巨額の利益を生み出すことができた。デイの権力のもとにその活動の基盤を置いていたユダヤ人商人たちは、同時にフランスの外務大臣タレーラン

Talleyrand とともに緊密な利害関係を結んでいた³²⁾。タレーランはアルジェにおけるユダヤ人商人の支配力のゆえに、その商取引をユダヤ人たちに任せたのである。

一方、総裁政府の財政状態は逼迫しており、フランス政府はハッサン・デイに債務を申し出なければならなかった。第1総裁であったボナパルトは、それ以前の債務の返還を考えていたのだが、当初、100万リーヴル余であったフランスの債務額³³⁾は、1801年には利子・仲介手数料・税負担を計算に入れると、815万1012フランにまで達した。フランス財務局は、そのうちの約半分にも満たない額の372万5631フランをバクリ・ブスナッチ連合商會に支払った³⁴⁾。しかし、この時、債権者のデイは姿を表わさず、デイは返還額の1銭も受け取らなかった³⁵⁾。フランスとアルジェ政庁との関係を決定的に悪化させることになる係争問題はこのようにして始まった。

また、これに先立つ1798年のナポレオンのエジプト遠征はアルジェ政庁の協調的な政策を転換させ、イスラム教国エジプトとの連帯のしるしとして、ムスタファ・デイ Dey Mustapha はフランスへの戦争宣言を行ない、フランスへの輸出の特許はこの時廃止された³⁶⁾。

しかしこうした状況にもかかわらず、第一総裁ボナパルトは、代理大使デュボワ・テンヴィル Dubois-Thainville の積極的な調停工作により、アルジェとの和平を結び、同盟条約をも締結するに至った (1801年12月17日)。しかしムスタファ・デイはフランスの債務未払いのことで敵意を抱いており、イギリスの後押しによって一時的な平和は打ち破られた。1802年以降、アルジェの海賊船の略奪 (razzias) がコルシカ島の沖合やプロヴァンスの沿岸地方で再び始まった。このような情勢に直面してボナパルトは、アルジェのデイ政権に対して、フランスがアルジェとの国交を断絶するだろうと呼びかけ、さらにアルジェの海賊がフランス国旗をかかげた船舶への私掠をやめないならば、その報いを受けるだろうと脅した。そして彼は、アルジェの都市防衛がどのようなものであるかを調査させるために、海軍の有能な艦長ベルジュ Berge を急遽アルジェに派遣した。この海上での示威運動に驚いたムスタフ

ァ・デイは、妥協の道を選んでフランスの要求をのんだ。しかし彼は、債務問題をフランス人に忘れさせないように喚起を促したのだが、デイはフランス政府からその債務額のごくわずかな一部を受け取ることしかできなかった。

アミアンの和約が破れ、さらにトラファルガー沖海戦の後、フランス艦隊はもはやアルジェ政庁にとっては脅威ではなくなり、デイはイギリスとの同盟の方向に向かっていく。デイ政府はまた、イギリス艦隊がフランスの商社の海外支店を包囲するがままにさせ、ロンドン政府はフランス商社の海外支店を手に入れようとさえ望んだのだが、ムスタファ・デイ（1805年に絞殺された）の後任者となったアハマド・デイ Dey Ahmed は、すべての譲渡に反対した³⁷⁾。

一方フランスは、革命期の保護主義を継承したナポレオンの経済政策、いわゆる大陸封鎖（1806年ベルリン勅令）によって、大陸市場からイギリス商品を駆逐し、その戦力の根源に打撃を与えようとした所期の目的を達成するに至らず、逆に、海上権を握るイギリスによって、フランスおよびその同盟国の逆封鎖をもって報いられた。イギリスがとったこのような対抗措置は、フランスーアルジェリア関係をも破壊し、アルジェリアを、その伝統的な貿易港であるマルセイユやリボルノ、スペインのいくつかの港からも断絶した。その結果、アルジェのデイ政府はフランス第一共和制政府に輸出した小麦代金700万フラン以上の支払いを受けることができなくなった。この時以来、イギリスの海上貿易がアルジェリアの対マルセイユ貿易に取って代わった。ロンドンのイギリス政府は、アハマド・デイと協定を結び、貿易商の利益となる“アフリカ会社 Compagnie d'Afrique” への特権をデイへの26万7500フランの納付金と引き換えに獲得した（1806年）。こうして、イギリス政府による10年間のアルジェリア貿易の独占はアルジェリアの伝統的な輸出販路を規制することになった。特に、ナポレオン帝政下のヨーロッパは、その間、フランス南部とイタリアの需要を満たしていたアルジェリア穀物の輸入が断たれたため、ロシアの小麦を輸入することによって補っていた。しかし、エクスマウス卿のアルジェ遠征後の1816年、

デイ政府がイギリスと10年間結んでいた協定を破棄した時には、アルジェリアの小麦は販路を失ってしまった。小麦価格をさらに切り下げたにもかかわらず、アルジェリア小麦がかつて独占していたヨーロッパ市場を再び見出すことはできなかった。そして、この間、ヨーロッパ市場には引続きロシア皇帝の下で農奴労働に依存していた、より低価格のウクライナやクリミヤの小麦が供給されていた³⁸⁾。

フランス政府は、アルジェリアとの貿易の再開に対して消極的であった。1815年、王政復古とともにドゥヴァル Deval 領事の使節団がアルジェに派遣され、1817年にはタレーランがデイへの納付金21万4000フランを支払うことでフランスの特許の回復を認めさせる条約の批准にこぎつけたのである³⁹⁾ が、この条約によってフランス政府は未払いの小麦代金の債務を定期的に支払うことを約束したにもかかわらず、貿易不振を口実に支払いを拒否していた。さらに、1819年、英仏連合艦隊によって、アルジェに対して軍事的圧力がかけられた⁴⁰⁾ ことは、フランスーアルジェリア関係を一層悪化させるだけであった。貿易関係の復活は、1819年12月23日と1820年7月24日の2つの協定によるが、その時まで独占していた“アフリカ会社”の特権を譲りうけた“パレ・ド・マルセイユ商会 Maison Paret de Marseille” が、1822年1月1日以降8年間の特許を得て、貿易業務が再開された⁴¹⁾。しかし、1815年以降、通商上の特許はもはや18世紀中葉におけるのと同じような重要性をもたなくなっていたし、フランスの貿易商によるアルジェリア小麦の買付けはますます無意味なものになってきていたので、悪化したフランスとの貿易関係を立て直すことは、オジャックによる農産物輸出の努力にもかかわらず、ますます困難になっていた⁴²⁾。

このようなフランスとの貿易関係の悪化と衰退は、アルジェリア経済に次のような結果をもたらした。第1に、地中海沿岸の貿易港に近い平野部の穀物（小麦が中心）生産を低下させた。ミチジャ Mitidja 平野やボヌス平野、アルズー Arzew 平野において、それまで続いていた穀物耕作は縮小され、放牧地の拡大と牧畜の増加がみられた。このことは、フランス遠征軍の将軍、兵士たちの非公式の文章や

文学の中に見い出される。たとえば、アフリカ遠征軍参謀部長のデスプレイ Desprey 将軍はクリミヤの安価な穀物がバルバリア沿岸の農業に大きな打撃を与え、農村のマウル人は毎日減少していった⁴³⁾、と書いている。アルジェリア経済にとっても有害である商業協定にデイが同意することは、イスラーム教国ではないフランス君主制に服従する行為とみなされ、すでに地に落ちていたアルジェ政庁のデイの国内的な統治権力をさらに弱めることになった。

もうひとつの結果は、フランスとのアルジェリア貿易量の決定的な削減であるが、この状況は、アルジェリアにおけるイギリス貿易に対抗して、フランス貿易の覇権を武力によって再び打ち立てようとするマルセイユ商人の願望を生み出した⁴⁴⁾。そして、やがてフランスのアルジェリア征服を導くことになるデイ政権の運命は、アルジェのユダヤ人債権者の手に委ねられることになった。

4 「扇の一打」事件、そしてアルジェ遠征

フランス軍のアルジェ遠征に先立つ3年間のアルジェ封鎖は、1827年4月29日の「扇の一打」事件に端を発した。これはフランス革命の最中にアルジェリアから輸出された小麦代金の決済をめぐる会談中に、アルジェのユダヤ人商人バクリと手を結んだフランスの駐アルジェ領事ドゥヴァル Deval (Pierre) がフセイン・デイを愚弄し、それに立腹したデイが手にしていた羽根扇で領事の頬を打ったという事件であるとされている⁴⁵⁾。そもそもこの事件の原因となった小麦取引はどのように行われたのか、そしてそこから引き起こされたユダヤ人商人バクリの債権問題とはどのような問題であったのか、をまず明らかにしていこう。

革命中の総裁政府の下で、アルジェリアから小麦が大量に輸入されたことはすでに述べたとおりであるが、この小麦取引を仲介したユダヤ人商人バクリとブスナッチは、アフリカ会社の代理店が1荷45フランでフランス軍に引き渡していた小麦を、1荷120フランに引き上げて売却する契約を結んだ⁴⁶⁾。しかし彼らはフランス政府には可能な限りの支払い期限の猶予を認めたのであったが、デイはこの高価格での小麦取引に引かれて、ユダヤ人にその仲介を

任せた。

1801年のアルジェとの和平が結ばれた後、フランスの債務額815万フランのうち、373万フラン⁴⁷⁾がバクリ・ブスナッチ商会に2度に分けて支払われたが、ナポレオンはデイには何も返済しなかった。そして、この未払いの小麦代金の決済は、王政復古時代にもち越されることになった。1819年、タレーランが復帰するとともに、バクリ・ブスナッチ商会の小麦取引が引き起こしたフランスの債務問題が再燃する⁴⁸⁾。この時、フランス政府は、利子を含んだ債務額は700万フランに達したと考えたが、これに対して、バクリ・ブスナッチは、2400万フランを請求した。しかし、フランス政府は700万フランのうち、450フランのみバクリ・ブスナッチに返済し、彼らはそれを受け入れた。デイは、ユダヤ人商人がフランスに売った小麦は、デイの小麦であるのだから（実際にはアルジェリアの農民から汲み上げた小麦であるが）、自分こそがバクリ・ブスナッチの債権者であると主張した。しかし、デイはフランスにおいて行われた債務の返済の手続きについて精通しておらず、彼は王党政府に対して次のように述べた。バクリは自分（デイ）の債務者であり、フランスはバクリから借金をしているのであるから、フランスが自分（デイ）に支払うべきである、と。このような議論は、その後、7年間続いたが解決せず、1826年8月、フセイン・デイはついにバクリを投獄し、彼にフランスとスペインに対する債権をすべて放棄するよう強要した⁴⁹⁾。しかし、デイのこの行動によっても事態は何も変化しなかった。

デイがフランスに対して不満を抱いているのは全く当然のことであると考えている間は、アルジェ政庁は、衰退しつつあるとは言え、キリスト教国にとっては依然としておきみな恐るべき強国であった。

フセイン・コージャは、1818年、前任者6人が暗殺された後にデイとなったのであるが⁵⁰⁾、とりわけ忍耐力に欠けた人物であったとされる⁵¹⁾。そして、フランスがローマ教皇の船舶をフランスの保護下に置くことを宣言した時、デイはフランスの要求をすべて拒絶し、「ローマ教皇は年貢を支払うように！」と声明した。そして、デイの無礼と暴力の勝手気ままな行動がこれ以後つづく。2隻のローマ船、

サン・アントニオ号 San-Antonio, サン・フランシスコ号 San-Francisco が拿捕された。アルジェリア沿岸のフランスの2つの建物が占拠され、取り調べられた。フランス人商人たちがスペイン船の船上で捕えられた。この後者の2つの出来事については、デイは謝罪したが、教皇 (Saint-Père) 下の艦船への攻撃は止まなかった⁵²⁾。

このような情勢の中で1827年初頭におけるデイとフランスとの間の係争問題とは、フランスが不満を抱いていたボヌ事件とデイによる船舶の拿捕、そしてデイが不満を訴えていたバクリのかかわったフランスの債務の未払い問題であった。そして、双方からの訴えによる未解決の問題をさらに悪化させた要因は、デイがフランス領事ピエール・ドゥヴァルをひどく嫌っていたことである。彼はドゥヴァルを、バクリに雇われていると非難した⁵³⁾。ドゥヴァルはレバントのフランス領事館の通訳官を父親にもつ人物で、彼はその誠実さゆえにタレーランのお気に入りであった。しかし、マルセイユの商業会議所 Chambre de commerce de Marseille と他の領事たちの間ではドゥヴァルの評判は甚だ悪く、彼は悪党のような人物とさえみなされていた⁵⁴⁾。デイは、このようなドゥヴァルの召還を要求していたのだが、フランスの宮廷は、デイが領事の交代を要求するのは、新しい領事の着任の際にデイに支払われる慣習的な贈与をデイがうけたいがためだとの嫌疑をデイにかけた⁵⁵⁾。

1827年4月29日、決定的な事件が起こった。「教会の長女」であったフランスの、駐アルジェ領事の肩書で、ドゥヴァルはローマ教皇領の代表を引きうけ、アルジェにおけるローマ教皇の臣下の権利をデイに喚起するため、デイに謁見を願い出た。一方、フセインはこの機会をとらえて、フランスの債務支払いの訴訟を再び起こそうとしたのだが、会談はトルコ語での短い口論の末決裂し、デイは立ち上がってドゥヴァルに謁見の間を去るように命令した⁵⁶⁾。しかし彼は身じろぎしなかったで、ついにデイは手にしていた羽根扇で領事を打った。いわゆる「扇の一打」事件である。その夜、ドゥヴァルはフランス政府に報告し、デイが彼に謝罪するか、あるいは、彼を解任することをフランス政府に求めた。一方、

債務問題を訴えたフセイン・デイは、バクリ家に債務を償還させるという彼の考えを伝え、すでにリボルノに避難していたバクリ家をアルジェに引き渡すように、トスカーナ大公に強く命令した。

トスカーナへの戦争の脅威の下で、フランスはトスカーナ公国をその保護下におかなければならなかった。フランスから2隻の艦隊が航海に出た。1隻はリボルノに向かい、もう1隻はアルジェをめざした。その報復として、フランス商社の海外支店がデイの命令で占領された時、フランスによるアルジェの封鎖が宣言された⁵⁷⁾。

フランス国王シャルル10世は国内の反対派と国民の世論の転換をはかる必要に迫られており、「扇の一打」事件を口実にアルジェに出兵し、フランス艦隊はアルジェを封鎖することになったのである。この間、アルジェでは現地人によるフランス人捕虜の虐待が横行したため、両者間の不和は一層深刻化した。1829年8月、デイはフランスからの使節を放逐し、その使節が休戦旗を掲げた船に乗って港外へ去ろうとしているところへ砲火を浴びせかけた。ここに決定的規模の戦闘が開始されることになった。1830年5月26日、フランス大艦隊がトゥーロン Toulon 軍港を出帆し、6月13日アルジェ沖に到着して、シディ・フェルージュ Sidi-Ferruch 湾に投錨した。6月14日、フランス軍はアルジェの西のシディ・フェルージュに上陸し、6月19日、スタウエリ Staouéli に進攻して、アラブ人とカビル人の一軍を打ち破った。さらに、アルジェ軍を撃退しながら陸路アルジェに向かって進撃し、7月4日アルジェの市街戦になったが、古城砦フォール・アンブルール Fort Empereur を占領後7月5日、フセイン・デイが降伏し、フランス軍はアルジェを占領した⁵⁸⁾。ここに、フランス軍司令官とデイとの間に条約が締結され、デイ自身と市街の住民の身柄と財産の安全を保障することが取り決められた⁵⁹⁾。デイがアルジェリア領内に居住することも自由とされたが、1週間後、デイは家族や従者および家財とともにフランスのフリゲート艦でアルジェを発ち、ナポリに向かった⁶⁰⁾。これ以後、1831年1月1日にはメデア Médéa のベイ⁶¹⁾、9月19日にはオランのベイも降伏し、アルジェリアを立ち去った。他方、

現地社会との統合を強めていた東部コンスタンチヌ州のアフムド・ベイ Ahmed Bey は、アルジェ封鎖の時期から税制改革を行うなどして、フランスに抵抗を続けたが、1837年10月には、これもフランス植民地勢力の前に屈伏することとなり⁶²⁾、アルジェのデイ政権は完全に崩壊した。こうして、1518年にオスマン帝国の属州となって以来、約320年間つづいたアルジェリアのトルコ人支配はついに終わりを告げるようになった。

- 1) Desfeuilles (P.), "Scandinaves et Barbaresques à la fin de l'Ancien Régime" in *Cahier de Tunisie* n°15, 1956, p. 330, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 628.
- 2) Perrot., *op. cit.*, p. 56, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 628.
- 3) Devoulx (A.), "Le registre des prises maritimes, traduction d'un document authentique inédit" in *Revue Africaine*, T. 16, Alger 1872, pp. 75 et 240.
- 4) Devoulx (A.), "Un exploit des Algériens en 1802", *Revue Africaine*, Alger, 1865, p. 127.
- 5) Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 628.
- 6) Girault (A.), *Principes de colonisation et de législation coloniale*, Paris, 1904, p. 349.
- 7) Lacoste (Y.), *et al.*, *op. cit.*, p. 191.
- 8) スタンリー・レーン・ブール, 前掲書, 294-295頁。
- 9) 同上, 295-302頁。
- 10) 旧西ドイツの地名, ケルンの西南64キロ, オランダとベルギーとの国境近くにある。今はアーヘンと呼ばれている。同上, 303頁。
- 11) Le Marchand (E.), *L'Europe et la conquête d'Alger, d'après les documents originaux tirés des archives de l'Etat*, Paris, 1913, p. 45., in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 629.
- 12) 宮治一雄『アフリカ現代史 V 北アフリカ』山川出版社, 1978年, 44-45頁。
- 13) Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 629.
- 14) Lacoste (Y.) *et al.*, *op. cit.*, p. 195.
- 15) Masson (P.), "A la veille d'une conquête, concessions et compagnies d'Afrique, 1800-1830", *Bulletin de Géographie Historique et Descriptive*, 1909, p. 56, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 634.
- 16) リボルノ港については, 次のような研究がある。Braudel (F.), *et Romano (R.)*, *Navires et marchands à l'entrée du Port de Livourne*, 1547-1611, 1951.
- 17) Vallière (C. Ph.), *L'Algérie en 1781, Mémoire du Consul C. Vallière*, pub. par Lucien Chaillou,

- Toulon, Valbert Rand, sd, p. 65, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 634.
- 18) Hamdan Ben Othman Khodja (Sidy), *Aperçu historique et Statistique sur la Régence d'Alger*, intitulé en arabe "Le Miroir", 2è édition avec une introduction d'A. Djeghloul, Paris, 1985, p. 137; Mercier (E.), *Histoire de Constantine*, Constantine, 1903, p. 301, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 634.
- 19) Ayoun (R.), Cohen (B.), *Les Juifs d'Algérie, deux milles ans d'histoire*, Paris, 1982, p. 107, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 635.
- 20) Bloch (Isaaq), *Inscriptions tumulaires des anciens cimetières Israéliens d'Alger*, Paris, A. Durlancher, 1888, pp. 93-94, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 635.
- 21) Hamdan Ben Othman Khodja (Sidy), *op. cit.*, p. 138, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 635.
- 22) Le Marchant (E.), *L'Europe et la conquête d'Alger, d'après des documents originaux tirés des Archives de l'Etat*, Paris, 1913, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 636.
- 23) T. S. E. F. 1830-1837, p. 353, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 631.
- 24) Mauroy, *Du commerce des peuples de l'Afrique septentrionale*, Paris, S. L. 1845, p. 61, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 631.
- 25) Feraud-Giraud (L. J. D.), *De la juridiction française dans les échelles du Levant et de Barbarie*, 2è Ed. Paris, 1866, T. I, p. 234, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 631.
- 26) Masson (P.), "A la veille d'une conquête……", *op. cit.*, p. 65, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 631.
- 27) Venture de Paradis, *op. cit.*, p. 125, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 639.
- 28) Guenane (D.), *Les traités de l'Algérie avec la France, 1619-1830*, Alger, ENAL, 1985, pp. 339-348, in Saidouni (N.) *op. cit.*, p. 632.
- 29) Auzoux (A.), "Les origines de l'Europe nouvelle, la mission de l'Amiral Leissègue à Alger et Tunis", 1802 in *Revue des Etudes Napoléoniennes*, T. 13, 1918, p. 67.
- 30) Laborde (Le Comte A. L. J de), *Sur la guerre actuelle avec la Régence d'Alger*, Paris, 1830, p. 21; Le Marchant (E.), *op. cit.*, p. 52, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 632.
- 31) Ganiage (J.), *Histoire contemporaine du Maghreb de 1830 à nos jours*, Fayard, 1994, p. 83.
- 32) *Ibid*, p. 83; Joëlle Allouche-Benayoun, Doris Bensimon, *Juifs d'Algérie, hier et aujourd'hui*, Toulouse, 1989, p. 27.
- 33) Ganiage (J.), *op. cit.*, p. 83.

結 び

本稿では、「海域と地域」という本特集のテーマをうけて、19世紀初頭のアルジェリアのデイ政権の危機が、地中海を取り巻く国際関係とどのように関わっていたのかを検討した。それは、アルジェ政庁のトルコ政権の崩壊過程を描くことであり、同時にフランスのアルジェリア征服の原因を探ることもあった。

18世紀の地中海世界を特徴づけていた諸情勢は、第1にヨーロッパ列強の進出によるものであったが、西地中海において勢力の拡大をはかるヨーロッパ諸国に提起された課題は、地中海での航海の安全を守るために、アルジェを拠点とするバルバリア海賊の活動を終わらせることであり、そのためにアルジェのデイ政権と通商協定を結ぶことであった。一方、デイ政権はこうしたヨーロッパ列強の外交的経済的進出に翻弄され、特にイギリス・フランスの競合関係の中に巻き込まれて経済危機に直面する。イギリスのアルジェリア貿易の独占が、フランスとの貿易関係を断絶してしまうのである。しかし、18世紀以降のアルジェリアの貿易構造は、イギリス・フランスをはじめとするヨーロッパ諸国から製品を輸入し、アルジェリアからは農産物（主に小麦）や原材料（羊毛など）を輸出するという従属的経済関係の上にすでに成り立っていた。しかも、アルジェリアの地中海貿易は、外国の商人や海運業者の手に握られ、保護関税の撤廃による自由貿易の方向に向うにつれ、ますますこの従属構造が強化されていった。

デイ政権の財政危機は、17世紀後半以降の海賊活動の衰退による収入の低下が主な原因であったが、これを埋め合わせるためにデイは国内の農民からできる限りの農産物を吸い上げ、地中海の北側のヨーロッパ市場に向かわせることになり、こうした中でフランスへの小麦輸出が促進された。そしてアルジェリアの小麦は、革命期とナポレオン戦争におけるフランスの食糧補給を支える重要な資源となるのだが、この小麦輸出が混乱期のフランスの債務問題を引き起こし、ついにフランスをアルジェ遠征に向かわせる偶然の状況をつくり出すことになった。また、

(57頁へ続く)

- 34) Le Marchant (E.), *op. cit.*, p. 55, in Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 637.
- 35) Ganiage (J.), *op. cit.*, p. 83.
- 36) Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 633.
- 37) Ganiage (J.), *op. cit.*, p. 84.
- 38) Lacoste (Y.), *et al.*, *op. cit.*, p. 188.
- 39) Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 633.
- 40) Girault (A.), *op. cit.*, p. 349.
- 41) Guiral (P.), *Marseille et l'Algérie, 1830-1841*, Publication des Annales de la Faculté des Lettres, Aix-en-Provence, 1956, pp. 32-33.
- 42) Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 633.
- 43) *Journal d'un officier de l'Armée d'Afrique*, in Lacoste (Y.), *et al.*, *op. cit.*, p. 190.
- 44) Lacoste (Y.), *et al.*, *op. cit.*, p. 190.
- 45) 宮治一雄, 前掲書, 42頁。
- 46) Le Marquis de Roux, "Un coup de chasse-mouches et les Français débarquent", *Algérie, Histoire et Nostalgie 1830-1987*, Historia no. 486, juin 1987, p. 6.
- 47) Saidouni (N.), *op. cit.*, p. 637.
- 48) Ganiage (J.), *op. cit.*, p. 84.
- 49) Le Marquis de Roux, *op. cit.*, pp. 6-7.
- 50) *Ibid.*, p. 8.
- 51) Ganiage (J.), *op. cit.*, p. 85.
- 52) Le Marquis de Roux, *op. cit.*, p. 8.
- 53) *Ibid.*, p. 8.
- 54) Ganiage (J.), *op. cit.*, p. 85.
- 55) Le Marquis de Roux, *op. cit.*, p. 8.
- 56) Ganiage (J.), *op. cit.*, p. 85.
- 57) Le Marquis de Roux, *op. cit.*, pp. 8-9.
- 58) スタンリー・レーン・ブール, 前掲書, 305-307頁。
- 59) 浦野起央編著, 資料体系『アジア・アフリカ国際関係政治社会史』第4巻, アフリカ I (17), バビルス出版, 1979年, 543頁。
- 60) スタンリー・レーン・ブール, 前掲書, 307頁。
この時、デイの近衛兵の未婚者約2500人が、小アジアに送られた。残りの約1000人の兵士はしばらくアルジェに留まったが、やがて彼らもアルジェをあとにした。Girault (A.), *op. cit.*, p. 350 [298]。
- 61) ティトゥリー州を統治するメデア Médéa のベイ, ブー・メラグ Bou-Meyrag に対してクロゼル Clauzel 将軍は遠征軍を送り, ブリダ Blida とメデアを解放させた。 *Ibid.*, p. 351, [299]。
- 62) Nouschi (A.) *et al.*, *op. cit.*, p. 267。
コンスタンチヌ州のアフムド・ベイの抵抗に関する研究はチュニジア人研究者の次の学位論文がある。Temimi (Abdeljelil), *Le Beylik de Constantine et Hadj Ahmed Bey (1830-1837)*, Tunis, 1978.

ヨーロッパ人たちは自己文化の優位性を認識し、それが大航海時代以降のヨーロッパ人の行動を規定することになったと考えられる。その意味で、この認識のプロセスを中近世期における文化接触から導き出すことも、本部会と大きく関係する点であろう。

以上、無理難題を述べたが、全体を通じて感じたことは、土着文化の進出文化への影響という図式を設定することは簡単であるが、実際の歴史研究の中でそのことを呈示するのは非常に難しいということであった。この困難な課題に挑んだ各報告者に感謝

したい。最後に、今回初めてヨーロッパ前近代という枠で部会を持ったわけであるが、古代史と共催することにより、多くの収穫を得ることができた。特に、宗教の位置づけや文化の持つイデオロギー性、アイデンティティ形成の方法など、中近世と古代との差をあらためて知ることとなり、非常に刺激を受けた。運営などいろいろと大変な点はあるだろうが、この試みを今回だけで終わらせることなく、ぜひ継続させてほしい。(佐々木 真)

(16頁より続く)

この債務問題を生み出した張本人のユダヤ人商人たちが、リボルノの出身者であり、かつてリボルノにおいてアルジェの海賊の私掠品の流通によって財をなし、アルジェに移住してからは農産物流通に切り換えて巨万の富を築いた商人であるということも、転換期の地中海情勢を反映した象徴的な事柄であるように思われる。彼らユダヤ人商人はヨーロッパ勢力の進出とともに、フランスとも緊密な利害関係を

結び、フランスのアルジェリア征服を導き入れることになったのである。

いずれにせよ、1830年のフランスのアルジェ遠征は、地中海において衰退しつつあるオスマン帝国が、そして西地中海ではアルジェ政庁のトルコ政権が、排他的な勢力圏の拡大をはかるヨーロッパ列強にその制海権を譲り渡す転換点に位置づけられる事件であった。

(36頁より続く)

た書物である以上、その点をどのように理解しているのか、制度、教育、世相なども視野に入れながら、概説風であれ、「はしがき」などで、言及される必要があったのではないか。

四つ目は本書全体に関わる。本書の多くはわが国でもすでに紹介されている類の内容であり、一部を除いて、問題提起はかなり控え目である。それに、本書全体を流れる「社会史への途」については、「はしがき」で「全体性」への志向ということが指摘される程度にとどまっているし、叙述のスタイルも各執筆者によってかなり異なっている。全体とし

て、もうひとつまとまりに欠けるという印象を拭い得ない。もう少し工夫や調整がなされてもよかったのではないか。興味深い問題が数多く含まれているだけに、その点の努力が惜しまれる。

とはいえ、本書は、ヨーロッパ社会史の動向を知る上では数少ない恰好のテキスト（各論考の末尾に参考文献も付されている）であって、日本における今後の社会史研究にとっても、一定の重要な役割を果たしていくことは間違いないであろう。

(有斐閣、1995年7月刊、四六判、372頁、2100円)

【歴史学研究】お詫びと訂正

10月号(689号)

59頁編者名および60頁左13行目

国立歴史民族博物館

→国立歴史民俗博物館

増刊号(690号)

166頁右36行目、兄弟婚

→兄妹婚

裏表紙、ISHIMI Kiyohiro

→IWAMI Kiyohiro